



反逆の勇者と道具袋 2

α L P H α L I G H T

大沢雅紀

Masaki Osawa



アルファイト文庫



アーシャ

はくしゅ
カストール伯爵家次男。27歳。
フリージア王国獅子騎士団副長。
シンイチやドンコイを馬鹿にしている。

ウリエル

白い羽を持つ銀髪の美女。
年齢不詳。
光の聖霊の代弁者たる「天使」。

ドンコイ

カストール伯爵家長男。28歳。
フリージア王国では有名な放蕩者。
容姿も言動も醜いと評判。

アンリ

犬族の女の子。10歳。
奴隷にされるがシンイチに救われ、
ヒノモト城の筆頭女官となる。

シンイチ

本編の主人公。17歳。
道具袋を唯一扱える「勇者」。
剣や魔法の才能はまったくない。

シルフ

風の精霊シルフィールドの
分身。1万歳以上。
いたずら好きな性格で、
いつもシンイチをからかう。

ウンディーネ

魔国の四大魔公の一人。120歳。
水と癒しの魔法を操る魔族の長。
シンイチの補佐も務める。

メアリー

元フリージア王国第四王女。
14歳。妾の子として冷遇
されていた。前魔王の力を
受け継ぎ、大魔術師となる。



フリージア城——大広間

その日は多くの貴族が緊張していた。

勇者であるシンイチと敵対した事で、周囲から孤立してしまったフリージア皇国。現在、この事態を打開する対策を話し合う会議が開催されていた。

そしていよいよ、問題の渦中にあるカストール家が皇国会議に出席するのである。

以前からカストール家に反感を持つ貴族達は、勇者生贄計画の失敗の責任を取らせる形で、カストール家の失脚を狙う。

一方、もともと親カストール派だった貴族の中にも、優秀な後継者だと思っていた次男アーシャの失敗で、心が離れかけている者がいる。さらに一部では、これを機会にアーシャを糾弾し、放蕩者ドンコイを次期カストール家当主に立てて、彼を操り甘い汁を吸おうと意図する者もいた。

普段は国政に興味を示さない第一王子カリグラまで出席しており、会議は最初から異様な熱気に包まれていた。

会議が始まると、カストール伯爵は、自分に責任はないと主張する。

「何をおっしゃるか？ アーシャ殿は貴殿の次男。親としての責任は免れませんぞ」

大貴族であるカストール家を、普段から快く思っていない貴族がそう責め立てるが、伯爵は顔色ひとつ変えずに反論した。

「アーシャは確かに我が次男ですが、もはやカストール家には縁なき者です」

「どういう事ですか!!」

「我々は、彼を正式に勘当しました。それに、騎士として国に仕えると決まった時から、アーシャはすでにカストール家の者ではなくなっているのです」

思ひもよらない伯爵の言葉に静まり返る会議場。

「……ち、父上、何をおっしゃるのですか？ 勘当など私は聞いておりません!!」

アーシャが悲鳴を上げた。カストール伯爵は今まで、優秀な息子である自分を愛し、跡継ぎにすると公言していたはず。それなのに、いきなり切り捨てるつもりかと睨みつける。しかし、カストール伯爵はギロリとアーシャを睨み返した。

「アーシャ、父として最後の言葉だ。お前は騎士になる時、カストール家ではなくフリージア皇国に忠誠を誓ったはず。お前が今生きているのも、国からの禄を食んでいるからだ。そうである以上、お前はカストール家の者ではない」

伯爵の言葉は限りなく冷たかった。

「……言われてみれば一理ありますな」

「確かに勇者生贄計画に加担した時点では、アーシャ殿の身分は皇軍獅子騎士団副長でしたな」

「騎士団副長としての失敗の責任を、実家に持つていくというのはいささか筋違いではないかと……責任は、やはりアーシャ殿と騎士団にとつてもらわねば」

裏で根回しを受けた有力貴族達が、ここぞとばかりに薄笑いを浮かべて同調する。

彼らはもともと、有能で高潔な騎士と呼ばれていたアーシャに好意的ではなかった。

むしろ、悪名高いドンコイがカストール家の後継者になつたほうが都合と判断し、伯爵から裏金を受け取ると、あっさりアーシャのみに責任を取らせる事に同意していた。

「確かななあ。カストール家に残つた男子はドンコイのみ。ドンコイの行いならカストール家にも責任があるが、騎士団副長殿の責任は騎士団にとつてもらうべきだよなあ」

ニヤニヤ笑いながら、第一王子カリグラも伯爵を後押しする。

「……カストール伯爵の言に理がある。余の部下の失態は、余が責任を取るべきじゃ。すなわち、余の代理人たる騎士団がな」

カリグラの言葉を受けて、ヘラート国王が結論を下した。

王の従兄弟であるカストール伯爵は、王の有力な味方である。それを処罰する事は、自

らの権力基盤^{きばん}まで失う恐れがあるので、絶対にできない。

しかも、当主であるカストール伯爵自身がアーシャを切り捨てるのであれば、もはやアーシャには一人の騎士以上の価値はないのである。どちらを守るべきかなど、最初から答えは出ているようなものだ。さらに、第一王位継承者であるカリグラ王子と親しいドンコイが後継者になれば、次世代になっても引き続き、カストール家は親国王派の有力貴族になるだろう。

カリグラとドンコイが目配^{めば}せするのを見て、このシナリオを描いたのが誰であるかを悟るアーシャ。

「（こ、この無能王子めが！ まさかドンコイに買収されて？ くっ、この私がなんとかという屈辱^{くつじやく}を。これはドンコイの策略^{さくりやく}に違いない。余計な事を父上に吹き込んだのだ。卑怯者^{ひきょうもの}め……）

今まで散々見下^{みくだ}し、あざ笑^{あざわら}ってきたドンコイに、アーシャは確実に追い詰められていた。

数日後、皇国騎士団のアーシャ直属の部隊に対して、ある命令が下^{くだ}った。

「皇軍獅子騎士団は魔国^{まこく}に赴^{おもむ}き、改めて経緯^{けいゐ}を確認して、勇者を丁重^{ていじゆう}にフリージア皇国にお連れせよ。命令があるまで決して手を出してはならない。作戦の責任者はアーシャ副長とする。また、この命令は完全に非公式のものとし、途中何があっても国は関与しない。

その代わり、『騎士の杖』を貸与^{たいよ}し、国としての便宜^{べんぎ}は図ろう」

王権代理^{しやうだい}の象徴である『騎士の杖』がアーシャに下賜^かされる。

「……謹^{つし}んで拝命^{はいめい}します」

魔王アンブロジア亡き後、混乱している魔国に騎士団百人のみで非公式に潜入し、勇者シンイチを連れ戻せなどという命令は、半ば死んでいと言っているようなものだ。

アーシャは観念し、膝をついて『騎士の杖』を受けとった。



フリージア皇国——大神殿

「ナムールの街に潜入していた間者^{かんじや}から、勇者シンイチについての情報が伝書鳩^{でんしよばと}で届きました」

魔王討伐メンバーの一人であった神官のノーマンが、大神官マリコルと面会していた。

「ふむ。どうやってかは不明だが、魔王を倒した後、勇者はナムールの街に現れたのだな？ そこで奴隷^{どれい}を解放したと……」

「はい。ナムールでは、解放された奴隷の間でこんな噂^{うわさ}が流れております。領主やヤクザの首領^{しゅりゆう}が消え、不当な扱いを受けていた奴隷達が助けられたと。その立役者は勇者を名乗

る少年と、魔王の力の後継者を名乗る少女だと」

「魔王の力の後継者を名乗る少女じゃと？」

マリコルが首をかしげる。

「はい。おそらくは、人質として魔国に差し出したメアリー王女かと思われます」

「ふむ。あの小娘も生き残っておったか。しかし、魔王の力とは……」

「はい。この話をうまく使えば、勇者を墮ちた偶像、悪の権化にする事ができるでしょう」

ノーマンがニヤニヤと笑う。

「よし。光の国の聖霊教本部にはワシが報告しよう。お前は、勇者が魔王と結託し、魔族に協力しているとの噂を広めよう」

「了解いたしました」

その後、ノーマンは国中の神殿に使いを出し、勇者シンイチは魔族の味方で人間の敵である、と通達したのだった。



フリージア城

謁見室

玉座ぎょざの前で膝をつくアーシヤ。

「アーシヤよ……いよいよ明日出発か。余が望んだ事ではないが、こうでもしないと貴族どもの不満は抑えられん」

ヘラート国王がアーシヤに話しかける。

「陛下のご厚情感謝いたします。必ず勇者を探し出して連れてまいります」

アーシヤが恭しく言う。

「……アーシヤと話がある。全員退出せよ」

隅に控えていた者が姿を消し、広間の中は二人だけになった。

「アーシヤよ。余は正直、お主とメルトにこの国を任せるつもりであつた。玉座が誰のものになるかは別として、実権はな」

「身に余る言葉、もったいのうございます」

思ってもみない王の言葉に、思わず身を硬くするアーシヤ。

「だが、ここまで貴族の間に不信感が広まると、そうも言っていられなくなる」

「はっ」

アーシヤはあからさまに肩を落とした。

「お主だけの話ではない。メルトも余も、今回の件で立場が危うくなっておる。もはや、勇者シンイチは存在するだけでフリージア皇国の害じや」

国王の言葉に、アーシヤはハッとして顔を上げた。

「よいな、今回は非公式の任務じゃ。つまり、お主も騎士団も皇都から動いていない事になっておる。対外的にはな」

「それは……」

「国の支援を受けられぬという事じゃ。と同時に、国の制約もない」

「……わかりました」

その一言で、アーシヤは国王の意を察する。

「よいか、必ずフリージア皇国の害を取り除け。それさえできれば、後の事はどうにでもなる」

「はっ。必ず陛下の意に沿うようにいたします」

再び頭を下げる。アーシヤの目に再び闘志が燃え上がった。

「……メルトに会って行くがいい。お主のために祈る女は、確実に力を与えてくれるじやろう」

「重ね重ねのご配慮、誠にありがとうございます。もはや父にも見捨てられたこの身、陛下とメルト王女にすべてを捧げます」

アーシヤは涙を流して礼を言い、退出していった。

（……この試練をアーシヤが乗り越えられれば、安心して娘メルトを託せる。頼むぞ。だが、失敗した場合は……すべてを背負って退場してもらうしかあるまい）

小さくなっていくアーシヤの後ろ姿を見つめながら、ヘラート国王はそう考えていた。

「アーシヤ様……」

「メルト様……」

メルト王女の私室で抱き合う二人の美男美女。

「必ず、必ずあの憎き勇者シンイチを滅ぼして帰ってきてください。そうしたら、私と……」

「はい。その時には、堂々とメルト様に求婚させていただきます」

恋人同士の逢瀬はいつまでも続く。二人はこの時、確かに幸せだった。



ヒノモト城——会議室

魔国各地からヒノモト城に集合した解放奴隷達のうち、希望する者はそれぞれの故郷に帰国する事が決まった。それでも彼らはしばらく城に残って、街の建設を手伝ってくれるという。

「食料は魔国の各地で大量に購入したから、当分心配はないよね」

元魔国の四大魔公の一人、ウンディーネに尋ねるシンイチ。いつの間にか彼女は、ヒノ

モト国の宰相さいしやうのような役割を担になっていた。

「はい。買い集めた食料はたっぷりあります。これだけで数ヶ月は大丈夫ですし、城にもっとも近いナムールの街から、商人も定期的に来る事になっています」

テキパキと答えるウンディーネ。今ではこういった内政に関わる事務はすべて彼女がやっていた。

本人もその立場に満足しているようで、シンイチの左隣の席に座ってニコニコと笑っている。

「あと、戦える兵士達は何人くらいいるんだろう？」

「えつとね。二百十三人だよ。てゆーか、ボクがいつの間にか彼らのリーダーみたいになつてるんだけど……」

シンイチが、右隣に座っているメアリーに聞くと、そのような答えが返ってくる。

「兵士達はメアリーの魔力の強さに憧あこがれてるんだろ？ 魔王玉の後継者だし……それじゃメアリー大將軍。兵士を指揮して治安の維持をお願い」

「なんでボクがいきなり大將軍？ ……まあいいか。女將軍ってなんかカッコイイし！」

シンイチに笑顔を向けて、メアリーが照れた。

「んで、私は？」

正面の机にちょこんと座っているシルフも、負けじと存在をアピールしてくる。

「シルフは分身達と連絡を取って、魔国や人間国に関する、なるべく多くの情報を集めて。

頼ちゅうけいんだよ、諜報大臣！」

「諜報大臣ってなにさ？ ……なんか悪役のイメージ……私かれんみたいな可憐な妖精に対して失礼だよー」

そう言いながらも、嬉うれしそうに飛び回るシルフだった。

こうしてそれぞれの役割が決まったあと、シンイチ達は城の周囲が見渡せる塔に移動した。

「えつと……とりあえず、水をどうにかしないといけないなあ」

何もない平原にいきなり城を置いたので、現状、近くに井戸も何もない。

住民の事を考えると、水の問題は一番最初に解決すべきだった。

「そうですね……地下水が存在するのは感じます。まず皆に井戸を掘らせましょうか？」

ウンディーネが外の景色を眺めながら提案する。

「うん。じゃあウンディーネ、水が出そうな場所を教えてください」

シンイチの指示を受け、ウンディーネと水の魔族はヒノモト国中を搜索する事になった。

「ここですね。ここに水が集中しています」

数十分後、早くも調査を終えたウンディーネは、地下水が一番集まっている地点を地図上でシンイチに伝える。

「わかった。兵士達に伝達して、建設工事の経験がある労働者を集めて」

シンイチがウンディーネにそう頼むと、半日後には、多くの筋骨たくましい男達が集まった。早速目的の場所に向かうシンイチ達。

「陛下、言われたとおりに集合しました。今から掘るのですか？」

「ああ。掘った後にレンガで補強して壁を作って……でもレンガがないよな」

「今日は掘るだけだと聞いておりましたので……さしあたり、掘り進んでから用意しようと思います。ただ、魔国より取り寄せますので、少し時間がかかるかもしれません」

そんな報告を聞いてシンイチは考え込む。

「レンガの手配には時間がかかるのか……それに、この壁とか邪魔になるなあ。これをバラしてしまえば一石二鳥なんだけど」

水脈の上の地面には崩れた古い防壁の遺跡があり、作業の妨げになりそうだった。

「待てよ。こいつをいったん道具袋に入れて……『収納』！」

シンイチが念じると、レンガで出来た古い壁がすべて消える。

「よし。崩れた部分を削って出ろ」

再びシンイチがつぶやくと、もろくなった部分が取り除かれ、新品同様のレンガの山が

出現した。

「す、すごいですな」

「シンイチ陛下万歳！」

まるで奇跡でも見たかのように、周囲の男達がざわめく。

「それじゃ皆さん掘って……いや、ちょっと待てよ。これを応用したら……」

ブツブツ言いながら何かを考える。

「また何か変な事に道具袋を使う気だね。今度はどんな使い方をするのかな？」

シンイチの隣でやり取りを聞いていたメアリーが、半分呆れながらも期待するように顔を輝かせた。

「シンイチ様は賢者ですから。きっとすばらしい事を考えているのですわ」

後方にいるウンディーネも目をきらきらさせてシンイチを見守っている。

二人ともシンイチの知恵を信頼し、いったい何が起きるのかを心から楽しみにしていた。

「ウンディーネ。水までほどのくらいの深さ？」

「ええ。だいたい十二メートルくらいですね」

「そんなもんか……」

さらに考え込むシンイチ。

「よし。考えていても仕方がないから、とにかく試してみよう。『底までらせん階段がついた十二メートルの穴』の形で、地面の土を収納！」

シンイチが地面に手を当てて念じると、いきなりその姿が消えた。

「シンイチ……！」

「シンイチ様!？」

メアリーとウンディーネが同時に叫び声を上げる。

目の前にはいつの間にか大きな穴が開いていた。二人は慌てて中を覗き込む。

底には大きな地下水の泉があり、その中央にシンイチが浮かんでいた。

「もう!! もうちょっと考えて道具袋を使いなよ！」

魔法でシンイチを助けたメアリーが、腰に手を当てて怒るように叫んだ。

「まったくです。シンイチ様は王様なんですよ。危険な事はしないでください！」

ウンディーネは涙目になっている。

まったく考えなしに足元の地面を収納したため、シンイチは当然のごとく落下してしまつたのである。幸い、下に大きな泉があつたので、気絶する程度で済んだ。

「いや、ごめんごめん。道具袋を使つたら簡単に穴を掘れると思つただけど、まさか自分が穴に落ちるとは……けど、これで面白い事がいろいろできるな。よし、ここは周りが



崩れないようにレンガで――」

「はい。すでに手配していますわ」

ウンディーネが答える。シンイチを救助したあと、彼女は男達に命じて、水場として使えるようにさっそくレンガで壁や階段を補強していた。

これで、水不足の問題も当面はしのげるはずである。

「ありがとう。次はね……」

こうしてシンイチの街づくりが始まった。

「健康で文化的な生活を送るには、とりあえず電気、ガス、水道、医療、道路が必要だと思っただ」

ウンディーネ達に相談するシンイチ。いつものメンバーが城の会議室に集まっていた。

「うーん……知識共有したからなんとなくわかるけど、この世界にはそんなものないよ」
メアリーが困惑したように首をかしげた。

「そうですね。いくらシンイチ様でも、元いた世界の知識を深いところまで知っておられるわけではないですし」

隣でウンディーネがため息をつく。

「電気はどうしようかな。魔法で雷って出せる?」

「光属性のサンダーの魔法だね。えい!」

メアリーが女神の杖を振ると、パチパチという音がして、小さい稲光が走る。

「元の世界じゃ、雷は瞬間的なものだし、強力すぎるから発電には利用できなかったけど、それをコントロールできるなら……」

「明かりなら、『ライト』の魔法を使えばいいよ?」

「確かに明かりだけならそれでいいけど、電気っていうのは、他のすべてのエネルギー源になるんだよね。まあ、仕方ないから、研究者に任せよう」

シンイチは、「属性魔法が使えて探究心がある人」という条件を満たす魔族や人間を、研究者に指名して、西の塔で技術開発を行わせていた。

雷を恒常的な明かりに変えるというアイデアだけでも示したら、彼らが何とか形にしてくれるかもしれない。

「他にないかな……雷の電気エネルギーの利用方法。光る、動力源になる、痺れる……痺れる?」

そう言っふと思いつく。

「メアリー。弱い雷魔法を俺の腕に流してみて」

シンイチが自分の手を差し出した。

「いいよ! えい!」

メアリーがシンイチの手を取った瞬間、強烈な刺激がシンイチの身体を走り抜ける。
「ぐぎやにら！ 痛い！ もっと弱く！」

「そんな事言っても、これ以上弱くできないよ……」

何回試しても強すぎて、ついにシンイチは床にうずくまってしまった。

「ふふ、メアリーさんは魔力コントロールが上手くないかみたいですね。私が代わりに試してみますわ」

ウンディーネがメアリーに代わって、杖を振りながらシンイチの腕に優しく触れる。

「もつと、もつと弱く……」

「は、はい。これくらいですか？」

「しびびび……うん。これくらい。それで——」

シンイチはおもむろにテーブルの上にあったナイフを取り、自分の腕に切りつける。傷口からは真っ赤な血が溢れ出てきた。

「シンイチ!?」

「シンイチ様？ いったい何を？」

気でも違ったかと心配してシンイチに駆け寄る二人。

「大丈夫。うん、痺れている間は痛みも鈍くなるな。体内に直接電流を流して、痛みの電気信号が神経を通して脳に伝わるのを防ぐ。これを応用したら……ウンディーネ、ちよつ

とごめん」

いきなりウンディーネをぐいっと引き寄せ、顔を近づける。

「シ、シンイチ様、いきなり何を……?」

真っ赤になるウンディーネ。隣ではメアリーが黒いオーラを放っているが、鈍いシンイチは気づかない。

『『知識共有』だよ。今俺が思いついた事を、ウンディーネや雷の魔法を使える人……えーつと、光属性の魔法が使える人って事になるのかな？ その人たちに研究してもらいたいんだ』

「そ、そうですか。では『知識共有』……」

二人の精神がリンクし、シンイチの考えがウンディーネの中に流れ込んでくる。

（身体が動くのは脳からの電気信号を受けた結果？ 雷の魔法で痺れて身体が動かなくなるのは、神経の電気信号が混乱するから……それを応用して、痛覚の電気信号を脳に伝えるのを阻害する魔法の開発？ つまり、『麻酔』の魔法）

『知識共有』を終え、そつとシンイチから頭を離すウンディーネ。

「す、すばらしいです。要は魔力のコントロールが重要になってくる分野なので、魔力が弱い人でもこの魔法は習得できます。それに、光属性の魔法を使える者は多いのですが、これまでは雷の攻撃魔法とライト代わりくらいにしか利用できませんでした。でも、これ

で新しい可能性が生まれました。すぐに開発させます」

驚きと嬉しさのあまり子供のようにはいしゃいしまうウンディーネ。

「な、何だよう……ボクにも教えてよ！」

「うふふ。魔力が大きいだけのメアリーさんには、習得が無理な技術かもしれませんがね。

私なら簡単にできますけど」

ウンディーネはそう言って微笑むと、シンイチに肩を寄せる。

「ムキー！」

話に付いていけず、地団太を踏むメアリーだった。

「はい。それでは治療しますね。『ヒール』」

ウンディーネが優しくシンイチの腕を取り、傷ついた箇所を手をかざす。温かい光に包まれ、ナイフの傷がみるみるうちに癒えていった。

「やつぱりすごいな……こんな簡単に傷が治るなんて」

「ふふ。私達水の魔族は、魔国の中で主に医者として活躍していたんですよ」

ウンディーネが形の良い胸を張る。

「そ、そう。ねえ、戦争で腕とか足とかがなくなった人も、治療できるの？」

シンイチが目のやり場に困りながら、ふと尋ねた。

人間国との戦争で傷ついた魔族や獣人族の中には、身体の一部を失った者が多い。彼らは手や足、目などを失って生活に不自由している。

仕事をしたくても雇ってもらえず、勇者の噂にすぎるようにヒノモト国に集まってきていた。

「そ、それが……エリクサーを用いても、手や足を再生する事はできないのです。骨折くらしいなら治せるのですが」

一転して、ウンディーネが悲しそうにうつむく。

「……その魔法は何百年も研究されているけど、未だに完成してないんだよ」

先ほどまでとは打って変わり、メアリーも辛そうな顔をしている。

医療技術が発達していないこの世界では、傷が化膿して手に負えなくなり、手足を切断するしかないといった悲劇も多い。

「そうだね。足を生やすなんて都合のいい魔法があるわけな……ん？」

頭の中で何かがひっかかる。

「あ、待てよ……再生医療の実験で、カエルの切断された足の神経を増やすと再生が始まる、って記事がネットにあったな。生体電流の量が増えたからそうなるって」

記事の内容を必死に思い出すシンイチ。

「んで、この世界では魔法によって、人為的に電気エネルギーをコントロールできる。さ

らに、自動で魔法と同じ効果を生み出す、魔具まぐという一種の機械もある。ウンディーネ、『ピール』の魔法が込められた魔具はある？」

「ええ。普通に市場でも売られていますわ。ほら、これが『治療の指輪』です」

ウンディーネがシンプルなデザインデザインの指輪を差し出す。

「わかった。これなら何とかなるかもしれない。ちよつと試してみよう」

そう言うのと、シンイチは再びナイフで自分の腕を傷つけた。

「シンイチ、またそんな事をして！」

メアリーが顔をしかめてシンイチを諷める。

「平気だよ。それで、今この腕に『治療しろ』という命令の電気信号が流れているはずだから、パターンを解析かいせきしてみて」

「解析ですか？ わかりました。なんとか頑張ってみます」

ウンディーネはシンイチの腕を取って、電流の流れを把握しようと集中した。

「電流が読み取れたら、意識的に傷口にその電流を大量に流すよう、『サンダー』を使ってみて」

「はい。この電気信号をたくさん流す……」

ウンディーネが念じると、なぜかみるうちにシンイチの傷が塞ふさがっていった。

「こ、これは？ 私は『ピール』の魔法を使ったわけではないのですが……」

驚くウンディーネ。低級の雷魔法だったので、使った魔力は驚くほど少ない。

「ね、ねえ。今は何やったの？」

メアリーも驚いた様子でシンイチの腕を覗き込んできた。

「より効率的に体内の再生力を上げる方法だよ。生物の身体は、傷を負った時、元の状態に戻るようにプログラムされている。その治療の電気信号を意図的に集中させると、傷は早く治るんだ」

現在の先進医療でも、骨折部分に刺激を与えると二倍の速さで治るといった事が判明している。それを参考にして、シンイチは体内の電気信号を魔法で制御し通常より多く与えれば、傷が早く治るのではないかと考えたのだ。

「小さい傷なら完全に元に戻るけど、大怪我であれば、傷口を塞ぐのが優先されるから、手や足がなくなっても再生されない。でも、欠損部分に意図的に再生電気信号を流す魔具を作れば、失った部分が再生されるかもしれない」

シンイチの脳裏には、貧民街ひんみんがわいで見た獣人族の哀れな姿が浮かんでいた。戦争で傷を負った彼らを、その手で救いたかった。

「わ、わかりました。私達が総力をあけて、完成させてみせます」

感動のあまり涙まで浮かべているウンディーネ。医療技術の大きな発展は、医者である彼女にとって悲願だった。

「シンイチ……すごいよ。こんな勇者を生贄にしようとしたフリージア皇国は、本当にかだよ。シンイチほど価値のある人なんか、この世界のどこにもいないかも」

尊敬の目で、メアリーはシンイチを見つめている。

「そんな。俺なんか、誰かが必死で研究した知識を中途半端に持つてただけだよ」

彼女達の尊敬の眼差しに照れるシンイチだった。

その後、西の塔に詰めている研究者の尽力により、痛覚の電気信号を阻害する麻酔魔法「アンペイン」や失った肉体を再生させる治療魔法「リボーン」が開発され、魔具に込められて、ヒノモト国の病院で使用されるようになる。

会議の話題は次に移っていた。

「ガスとやらはどうするのですか？ なにかいい考えが？」

ウンディーネが期待するようにシンイチに聞く。

「ふふ。以前テレビで見たんだけど、ガスと衛生問題を両立させるいい方法があるんだ」

「それは？」

「その前に、この世界では尿尿の処理はどうしているの？」

遅れてこの場にやって来たシルフに、シンイチが声をかける。

「うーん、穴を掘って埋めるだけかな」

シンイチから言わせれば前近代的な、ごく簡単に単純な処理方法だった。

「臭いの処理は？」

「吸臭石きゅうしゅうせきっていう風の魔具を一緒にに入れて埋めると、臭いが吸収されるんだよ。魔王城でも使われているしね」

シルフによると、オールフェイルではどこでもそういうやり方らしい。

「よし、それを使ってみよう。じゃあまず、鍛冶職人かじを呼んで」

シンイチの命令でドワーフが一人呼ばれた。

「王様。なんか用すか？ 俺に立派な剣を打てとか？」

現れたのは、ドワーフとしては珍しくヒゲのない、若者らしい容姿の男。彼はいろいろと自分のアレンジを加えて武器を作ったりするので、師匠ししょうと喧嘩けんかをして追い出され、ヒノモト城に来たらしい。名はカンカスと言った。

「いや。剣じゃなくて作ってもらいたい物があるんだけど。とりあえず、『知識共有』をしてもええないかな？」

シンイチが頭を下げて頼む。

「マジっすか？ 男なんて。いや、ご命令であれば構いませんけど……」

実に嫌そうな顔をするカンカス。

「シンイチ……ボクには手を出さないのに……」

「シンイチ様がそのような趣味を……」

カンカスだけではなく、メアリーとウンディーネまで、シンイチをジト目で見ていた。「変な勘違いしないでくれよ！ 作って欲しい物があるんだけど、言葉じゃ説明しにくいんだよ！」

顔を赤くして、慌てて弁解するシンイチだった。

「わかったつすよ……覚悟を決めるつす。以後よろしく……ポッ」

尻をキュッと固くして突き出すカンカスに、シンイチは思わず突っ込む。

「そこで恥じらうんじゃねー！」

お互いに真正面から向かい合い、嫌そうな顔をしながらもシンイチとカンカスはおでこをくっつけ、メアリーに知識共有の魔法をかけてもらった。

「ん？ こんな変な物を作るんすか？ いや、なんとかできない事はないつすけど……」元の姿勢に戻ると、カンカスが怪訝そうな顔をする。

「頼むよ」

「わかったつす。三日だけください」

そう言い残し、カンカスは西の塔に帰っていった。

「あと、シルフは吸臭石に使われている魔術を改良して、逆に、一定の量で臭いを放出し続ける魔術を編み出せる？」

「そりゃー魔術式を反転するだけだから簡単だけど？」

「よし、条件が揃った！ これでガスの問題は解決だ」

シンイチは椅子に深々と腰掛けて、ひとり悦に入る。一方、他の者は皆、首をかしげていた。

三日後、カンカスは配管が付いた、鉄製の台のような物を持ってきた。

「いやー。王様のイメージに近い物をつくるのに苦労したつすよ。とくに、この台の上の変な花の形をした部分が。でもこれなんなんすか？」

自分で作ったものにもかかわらず、カンカスが不思議そうに聞いている。

「台所で使うメタンガス式ガスコンロだよ。つまり、排泄物のガスに火をつけてかまどにするんだ」

「え？」

「そ……そんな事ができるのですか？」

驚いて目を丸くするメアリーとウンディーネ。

「試してみよう。シルフ、出臭石をここに入れてみて」

「はいはい。くっさー」

シルフは顔をしかめながら、出臭石——臭い（ガス）が出るように魔法をかけた、使用済みの吸臭石——を、シンイチの指示通りの場所に放り込む。

しばらくすると、花のような形をした部分から、いやな臭いが漂^{たよ}つてきた。
「くさ!!」

皆が慌てて鼻をつまむ。

「メ、メアリー。花火みたいな火を出して」

「う、うん。ちょっと火出ろ!」

シンイチの頼みに応じて、メアリーが出臭石に向かって女神の杖を振る。すると火花が散り、花の形をした部分に火がともった。

「え?」

杖を振った体勢のまま、メアリーが固まる。

「臭いが消えた……火がついている。薪もくべてないのに?」

ウンディーネも理解が追いついていないという表情だ。

「よし、成功! これでガスの問題はクリアだ!!」

一人ガッツポーズを取るシンイチだった。

火がともるかまどを見ているうちに、メアリー達はだんだんこの発明のすごさを悟り始める。

「え……これって、もう放っておけばいいの?」

「排泄物を燃料にできるのですか? すばらしい!」

両手を叩いて驚きを表すメアリーとウンディーネ。

「ははは。吸臭石は埋めたまま放置しておく、臭いが洩^もれてきて迷惑になるんだよね。

その問題も解決かあ」

シルフがそう言っ、シンイチに尊敬の眼差しを向ける。

「あとは、吸臭石に充分にガスを吸わせて臭いがなくなつた尿尿を荒地^{あれち}にまいて、一年くらいしてからそこに作物を植えよう。これで循環型エネルギーシステムの完成だ!」

こうしてエネルギー、衛生、肥料の三つの問題を解決し、ヒノモト国はどの国よりも便利で綺麗な街になろうとしていた。

「さて……次は街を建設するための材料集めだ。この近くに、建築に適^{てき}した材質の石がある岩山とかない?」

わずかな時間も惜^おしいという様子で、そわそわとシルフに聞くシンイチ。

「えつとね。ここから西に行ったところに、マルク山って岩山があるけど」

「それじゃ行ってみよう!」

ガス利用が上手くいったので、シンイチのテンションは上がりっぱなしだ。

ニヤリとしてシルフがシンイチの顔を覗き込む。

「なんかやけに楽しそうだねー？」

「道具袋が思ったより高性能だからね。これを使えば、簡単に街を造れるよ」

「面白そう。それじゃ行ってみよう」

メアリーとウンディーネに留守を頼み、シンイチはシルフと一緒にマルク山に飛んでいった。

「なんか、岩山って感じだねえ」

シンイチが空から一面を見回して言う。

「なんの変哲もないただの岩ばかりだよ。どうすんの？」

「岩山全部、収納！」

足元の岩山に手をつけてそう叫ぶと、数億トンもあるだろう周囲の岩が、全部消えてしまった。

「うん、綺麗になった」

見渡す限り平坦な荒野。マルク山はなくなってしまった。

シンイチはさっぱりとした顔をするが、隣でシルフはドン引きしていた。

「……シンイチ。やりすぎ」

「そ、そうかな？」

「なんか、シンイチが怖くなってきたよ……私、これでも一万年以上生きている精霊なのに。一歩間違えたら、たった一人で世界を滅ぼせる大魔王だね、シンイチは」

「ご、ごめん。自重するよ」

シンイチが謝ると、シルフは持ち前のプラス思考を発揮して、明るい表情に戻る。

「ま、いっか。誰の迷惑になるわけでもないし」

そう言ってシルフはシンイチを連れて次の場所に向かった。

「さて……まずは外堀からか」

城を囲む内壁から十キロ離れた地点に到着した二人。

「とりあえず、深さ二十メートルくらいの溝の形で、平原全部を囲うように土を収納！」

シンイチが地面に手を当てて念じると、深い堀がナハト平原の周囲に出現した。

「次に、高さ五十メートルの一枚板の形をした岩、平原を囲う形で出ろ！」

巨大な岩で出来た壁が、堀の内側にそびえ立つ。

「最後に、四つのエリアが区別できるように壁を配置して……」

平原の中心にある旧魔王城——ヒノモト城を基点とし、外壁と同じ高さの壁で東西南北四つのエリアに仕切る。

街への入り口となる門は、東と西に設けた。

「これで、街を丸ごと囲う二重の守りができた。人間国や魔国から攻められても防御できるな」

「……なんか、すごい。すごすぎて笑っちゃうね」

「まだまだこれからさ」

シルフとシンイチは笑い合った。

「次は水道だな。それぞれの家にいきわたるように、水道網を張り巡らせよう」

衛生的な都市にするためには水道が不可欠である。現代日本のように上下水道が完備した都市は汚物を洗い流せるため、疫病がはやりにくいのだ。

水道水を作るためには、井戸のような地下水源だけでは水量が足りない。もっと豊かな水源が必要となってくる。

シンイチがそんなふうに見ると、シルフは近くに湖がある事を教えてくれた。



ナハト湖沿岸

ナハト湖はヒノモト城の北側にあり、そこから西に、海に向けてナハト川が流れている。「うーん。ナハト湖から取水して、水道を引けばいいんだけど……」

シルフとともに湖の岸辺に飛んできたシンイチが、腕を組んで考える。

「はーい。川の流れを変えたら？ 城の近くまで引いたらいいんじゃない」

シルフが手を挙げて提案する。

「そうしたら雨が降った時に洪水になっちゃうかも。必要量だけ引きたいな。それに、湖なんだから当然ヒノモト城より低い位置にある。どう水を汲み上げればいいか……」

記憶をたどり、本で得た知識を思い出してみる。

「昔読んだ本に、らせん式揚水ポンプが載ってたな。風車を利用して水を汲み上げる方式。これを作ってみよう。よく図面を思い浮かべて……風車、出ろ！」

道具袋から手を取り出すと同時に、目の前に岩で出来た巨大な塔が出現した。

「シンイチ……これなに？」

見た事もない巨大な物を前にして、興味津々でシルフが聞く。

「まず、薄い岩の羽根でできた風車が風を受けてゆっくり回っているだろ？ それを動力にしているんだ」

風車の塔に入ってみると、回転する力が歯車の組み合わせを通して中央の柱に伝わって、その柱がゆっくりと回っている。

「さらにその動力が、歯車を通して水中につながる筒に伝わると、筒の中にあるせんが水をすくい上げて、上へ上へと運ぶんだ」

シンイチの言葉通り、水がゆっくりと上がってきて、筒から溢れ貯水槽に溜まっていく。「これで水を揚げる事ができたな。次は、ローマの水道橋を参考にして水路を作ろう。まず、この辺に水道橋を作るために……土台の穴が出来よう土を収納！」

地面に大きな穴が無数に現れる。

「次に、穴にはまるよう『支柱つきの水道橋』の形をした岩、出ろ！」

先ほどナハト湖から南の城に向かうように出来た穴に支柱が埋め込まれ、水路が上に通る橋が完成した。支柱の中には細い空洞を作り、一部の水が途中で落ちるようになっている。シンイチはその周辺一帯を農業エリアにするつもりだった。

シンイチはシルフとともに空に飛び上がり、城に向かっていく。

「城内の空中を水道が通るようにして、中央部分に貯水場所を作って……」

城の中央に巨大なプールを作り、城内用の水道の起点にする。

「あまった水は最終的に湖と反対側の南側に排水して、農業用水に再利用しよう。最後に海に放出するようにして……とりあえずこんなものか」

すっきりした表情でつぶやくシンイチだが、当然その頃、城下では大騒ぎになっていた。



ヒノモト城

「……なんで一日で外壁と水道が出来るんだよう」

満足顔で城の入り口に帰ってきたシンイチとシルフを見るや否や、メアリーが呆れたように言う。

住民達はちょっとしたパニックになっていた。

いきなり外壁がそびえ立ったかと思えば、城の北方に巨大な風車が現れて、岩製の橋がどんどんこちらに向かってくる。あつけにとられていると、やがて城中央部に巨大なプールが出来上がり、ナハト湖からきれいな水が流れてきた。

まるで絵を描いているかのように次々と完成していくインフラを見せつけられ、民衆は驚愕するしかない。

「……王様のシンイチって人、何者なの？」

「に、人間業じゃないよお」

あまりのスケールにびびっている民衆。シンイチを遠巻きに眺め、ひそひそささやき合っている。

「キヤハハ、シンイチすこすぎ」。単に勇者というだけじゃなくて、創造神の資格もあるかもね」

シンイチの周りを飛び回ってはしゃぐシルフの言葉を聞き、民衆の目がついに神様を見るようなものに変わった。

「ありがたや」

最後にはシンイチを拝む人まで出る始末で、シンイチは照れながら鼻の頭をかいた。

「ま、まあまあ。あと、スーパ―銭湯も作ろう!」

中央エリアの巨大な貯水プールから水を引いて、いろいろな風呂が楽しめるスーパ―銭湯の建設も始める。こうして風呂を用意する事により、衛生面がさらに改善されていった。

「とりあえず水道と外壁が出来たから、明日から街の北側と南側を、農業用地として開墾して。それと、城に近い商業エリアと東側の工業エリア、西側の住宅エリア予定地への細かい水道配線と下水道も必要だけど……それは現場に任せるよう指示を出して」

シンイチがウンディーネに声をかける。

「わかりました。労働者を集めさせて、さっそく取り掛かります」

そのやり取りを聞いていた民衆が、我先にと手を上げて殺到した。

「王様を一番に働かせちゃ申し訳ありませんからね」

「これは、どの街よりも進んだ街になりそうだ!」

「俺、国に帰らずにこの国に家族を呼び寄せた方がいいかも……」

城内の民衆も、シンイチの目指す新しい街に期待していた。



ヒノモト城——住宅地エリア

大きく開けた工事予定地に立つシンイチ。

「シンイチ様……今度は何を?」

ウンディーネが聞いてくる。

「ここに石の材料を用意しておくから、建物の建設に使わせて。ブロック状になった石出ろ!」

道具袋の中から、次々と四十センチ四方に切られた石が出てくる。

「あと何ボタンか必要だな。それ」

他にもいくつかの形状の石を取り出すシンイチ。

「……相変わらず、すごいね。でも、この石は変な形をしてるけど?」

メアリーが指差した石は、ある面には凸の形のでっぱりがついており、反対側の面には